

昭和三十三年における国語学界の展望

総記

○
もともと、学問上の業績というのは、国の財政か何かのように、一年を限ってその収支決算をあきらかにできるといった性質のものではない。学界に季節はないのだから、シーズンの終りめごとに、その期間をかえりみて、「今季リーグ戦は一般に低調であったが、わずかに東大の意外の活躍によって活気が添えられた」などというふうな概評をくだしたりできるようなものではないはずである。だから、ここに仮りに、昭和三十三年の一月には

じまって十二月に終る暦の上の一年間を単位にとつて、学界の展望なるものを試みるのは、全くの便宜に出ることであつて、言うまでもなく、その期限のとり方に本質的な意義があらうとは思えない。

もちろん便宜によるとはいつても、一年とか、半年とかいうものが、何かの意味で、あるまとまりを示しており、それをきりにして、その期間中に発表された業績の中から優秀なものを選定する場合の基準にすることは、各界において、現に行われていることである。曰く学士院賞の授与、曰く芥川賞の贈呈、曰く優秀映画の選定。これらは、一ペナントレース、一場所というよ

阪倉篤義

うな、ある完結を持った競争場裡から最高殊勲選手や敢闘賞力士を選定するのに比べては根拠がうすい。けれども、これらはまた、それぞれに、その功績をたたえ、あるいは努力を奨励するというような、別の意図を持った行事なのだから、それはそれとして、意義もある。

しかし、ここに試みようとする学界展望なるものは、これらとは全く目的がちがう。一年を単位にとつて、その間に発表された業績を品評し、秀作・力作を顕彰しようなどということが（たとえ結果的には、多少そういうことになる点があるとしても）決して窮極的目的ではないはずである。むしろ、たとえば上田賞・橋本賞などというものが制定されて、毎年もつとも優秀な国語学の論文をものした新進学徒に贈られるというような制度ができれば、これまた結構なことではあらう。——ただその選定が大変に困難であらうことは、たとえば芥川賞選定委員会の経過報告などというものを見ても想像にあまりがある。一作品・一論文に対する評価というものは、一往、標準以上と以下とを分けることには問題がないとしても、その先は、往々にして、全く思いがけない個人差を示すことがあるものらしい。——だがしかし、とにかくこの学界展望の意図するところは、そういうことではない。その目的

は、昭和三十二年一年間の学界をひろく見渡して、その間に、国語学という学問は、どのような動向を示し、どのような進展を示したかということ、その動向に添いその進展に力あつたと認められる論文を指摘しながら、とりまとめて述べることであらう。

さきにも言うように、たとえば一年というものを区切って、その間に発表された論文の中から、注目に値する（と自分が判断する）論文をいくつか選定するということは、出来ないことではない。しかし大きな学問の流れを、文字通り展望して、それらの論文が果してその流れの中に、どのように位置づけられるべきであるかを考定することは、わたくしごときの、とうてい完全になし得るところではない。それはもちろん、わたくしの勉強不足によるところが大きいのではあるけれども、また必らずしもそればかりではない事情もあらう。大体、学問の動向というようなもの、うまく、一年を単位にまとめられ、またそれを僅々一年足らずの距離をへだてて、適確に見きわめ得るとは思えない。真の意味での現代文学史を書くことが困難なように、一つの論文が本当に意義あるものであるか否かを決定し得るためには、発展後少くとも数年の年月のへだたりが必要であらう。明治以後の国語学界最大の業績ともいふべき特殊仮名遣発見の報告が、大正六年発表の当時には殆ど問題にされなかつたとか、つい三十年足らず前まで、現代語の研究論文では卒業論文と認められなかつたとかいう事実を、われわれは伝え聞いているのである。現代はもうその頃とは学問のレベルが違ふ、だから、そんな心配は無用だ、などと、言いきれるものなのかどうか。つい前年に現われた新しい新説や、一時的な流行が、大きく目に映って、それを学界の新しい

動向だなどと思ひあやまることの不安を、わたくしは、完全には拭い去ることができない。しかし本当の意味での展望というのは、それらをそれぞれに大きな学問の流れの中に正当に位置づけ得て、はじめてなされ得たと言えるはずのものではあるまいか。

なにも、そう展望ということばにこだわることはないではないか。要するに、去年一年間を見わたして、こんな論文が書かれた、こういう新しい方法が提唱された、というようなことを、とりまとめて述べておけばいいのじゃないか、と言われるかもしれない。それならそれで結構である。ただそういうことならば、去年中に発表された夥しい著者論文の中から、あら、選りをして、少くとも何らかの点で意味を持ち、注目に値すると認められるものを選び出した上は、それから先の価値判断は中止して、それらをなるべく網羅的に、ここに紹介しておくべきであらうと、わたくしは考える。去年一年間を限つていえば、学界でどんなことが問題になり、どんなことが提唱されたかという情況報告を、なるべく公平に、客観的に行うに止めておくべきであらうと、わたくしは考える。そういう文献の整理を中心とする学界展望が、読者にとつては、一番役に立つことになるのではなか。純粹の国語学の文献で、しかも比較的広く人々に知られる機会を持ち得た、たとえば『日本語音調の研究』『江戸語東京語の研究』『現代語の語彙調査』『敬語と敬語意識』『日本語』『日本語の起源』『日本人のことば』等々の単行本、また『古事記大成（言語篇）』『現代国語学』以下の諸講座や『国語学』『国語国文』『国語』『国語研究』『言語生活』『言語研究』等々の誌上に掲載された論文の類については、いまだその必要はないかもしれない。しかし、ひ

つそりと、小範囲の人々の目にしか触れないような形で発表された文献、たとえば『与論語の研究』『捷解新語附国語索引』『伊呂波字類抄国語索引』『大般若経字抄』『弘文荘待買古書目第三十号』などという自費出版書の類や、小規模の学会や各地の方言研究会の機関誌、また諸大学の紀要の類に掲載された、すぐれた論文の存在を、あまねく人々に紹介したり、あるいはまた、手に入りやすいものでありながら、国語学プロパーの書物ではないというところのために、ひょっとと見逃されているのではないかと思われるものの中に、一例を言えば『図説日本文化史』（亀井孝氏による各時代語解説）、『郷土研究講座7』（太田晶二郎氏の「古文書のみ方一異体学一隅」のようなものがあり、『中国語音韻論』『言語学概論（高津春繁）』の類や雑誌『英文法研究』『フランス語研究』等に掲載の論文にも、直接間接に日本語について述べるところがあつて、参考するに足るものがある、というようなことに注意を喚起し得たならば、それで十分意味があると思う。論文の数がふえるにつれてプライオリティの問題が深刻になるとすれば、いよいよこの必要は大きいであらう。

しかしまた、一方、それとは違った行き方も考えられる。たまにこの「展望」に筆をとることになつた者が、目についた範囲の中から自分の判断に従つて三、四の論文をとりあげ、一個人の立場からこれを論評する、という行き方をとるものであつて、これもまた一つの方法ではあらう。実は編輯部の意向では、むしろこちらの方法をとることが望まれている様子であるし、事実、すぐれた批評眼の持主が、丁度適当な場合に際会したなら、これによつて、一年間の学会の動向なるものを、それだけでうまくとり

まとめ、これに正當な位置づけを与えることが可能なことも、あり得るかも知れない。しかしたとえわたたくしごときがそんなことをやると、要するにそれは、いわば発表された論文を手がかりにして、単に個人的な意見・感想を開陳するに止まるものになつてしまふ。だから、これを、ことごとしく「展望」などと呼ぶことはまことにおこがましいことになる次第であつて、こういう種類の文章は、「何某氏の論文を読んで」という形で、別に単独の論文として発表すればよいものである。その方が、ことば足らずして妙に思わせぶりの批評になる恐れがないだけでも、結構である。本号の他の執筆者諸氏は、もちろん何れもすぐれた批評家でもあられようから、こういうことは杞憂に過ぎないと思うけれども、しかし右のような方法が、そもそもかなりな困難を予想させるものがあり、したがつて右のようなことになる危険を胎んでいるものであるとすれば、何もわざわざ、右のような文章だけを集めて、年間わずか四号しか出ない雑誌の貴重な一号をさいて、「展望号」などと名づけるものを編む必要は、ないように思われる。毎年、展望号が出て、これによつて「国語学会の立場から」その前年の業績の総決算が行われる、というような誤解を、ひょっと抱く人があつては、お互に迷惑であらう。「展望号」という名は、来年からは改めた方が、気が楽である。少くもこの「展望号」の執筆諸氏は、編輯部の意向を体して、右のような立場で筆をとられた人が多いはずであり、「展望」の名は、必ずしも体を表わすものではないことを、ひそかに心苦しく感じておられる方が、あるいは他にもあらうかと、あつかましくも勝手に付度して、あえてこういふ断り書を附すのである。

さて、わたくしが執筆を命じられた「総記」というのは、以下「国語史」「音韻」「文法」「語彙」「方言」「国語問題」などの部門においてとりあげられるはずの諸論文をのぞいて、直接その何れにも入れにくい、あるいは入れてしまうことは適当でないと思われるものだけを扱うことになっている。当然、ことは直ちに根本的な方法論そのものに結びつく場合も多いわけであるが、これを、右に言うような意味で本当に「展望」することは、大変にむずかしい。今はただそれらの中から、いくつかのトピックスをとりあげるだけで責をふさいでおこうとすることを、お許し願いたい。

「計量国語学会」発足のこと。

三十一年秋十月ごろから、よりより設立の準備が進められていた、この学会は、この三十二年をもって、いよいよ具体的な活動を開始するにいたり、五月十日には、機関誌『計量国語学』の第一号が、めでたく刊行される運びになった。以後、この年の中に、二号、三号と計三冊が刊行され、十月には国語研究所で、初の研究発表会が、盛会裡に催されるという、極めて順調なすべり出しを見せたのは、同慶のいたりであった。なにぶん、たとえはわたくしのごとくに高度な数式の処理方法となるとまるで理解しえない人間が会員中にあるような、この新しい学会にとっては、啓蒙の仕事がまず第一に必要でもあり、また意味のあることでもあろう。その点『計量国語学』が、毎号、はなはだ親切な、入門者のための講座を設けているのは、まことに適切で、ありがたい

ことであるし、また誌上に発表された論文について、会員がおたがい極めてフランクに批判しあう空気ができあがっているのも、気持ちのよいことである。

まずできるかぎり多数のデータを集め、そこから帰納的に論理を展開して、普遍性をもった結論をみちびき出すということは、これまでの実証的な国語研究の、かならず行ってきた方法であった。しかし、それらのデータが、はたしてどのような意味を持つものであるか、それが背後の、さらに大きい母集団的言語現象に対する標本として、どれだけの価値を担いうるものであるか、したがってまた、これによって、はたしてどの程度の確かさを有する結論をみちびき出し得るものであるか、ということに対する検討が、従来は、かならずしも厳密ではなかったことを、この学問はわれわれに反省させてくれる。文献をひっくりかえして、たんにねんに数えあげた、絶対頻度だけを頼りにして、ものを言うことの危険を、この学問はわれわれに思いしらせてくれるようである。数というものを取扱う上に要求される、態度の厳密さに、あらためて注意を喚起されるだけでも、この方法を学ぶことの意味は、ありそうである。

もつとも、たとえば「敬語と敬語意識」という書物などを見ても、現象を数量化して整理した結果、みちびき出された結果として最後に述べられている十数カ条の結論は、いずれも、ほぼわれわれの予想し得た通りのことのみであって、特に目新しい事実はないようである。数学というものは、基本的な現象を数式に翻訳してあらわし、その先は、この数学を展開させていくことによつて、どんどん思考を発展させて、ちょっと普通には思いつくこと

ができないような事実までもあきらかにしていくことの出来る点に意味があるのだそうであるが、そういうふうなことは、もっぱら実証することが求められているこの場合は、期待すべきものでなかった訳であろう。けれども、だからといって、こんなことぐらいなら、何もむずかしい数式を使わなくてもわかっている、というのとは間違っている。たとえ結論は同じに見えても、これまで、漠然と常識的に考えられていた事実が、これによって、ひじょうな確かさをもって考えられるようになったことの意味は大きい。現在、一般に科学は、いろいろの分野において、現象の中から、数値化し得る性質を抜きだしてしらべるといふ方向に、次第に向っているようであるし、また科学は、その根本の考え方を、広い意味で統計の学問においての言ってもよいとすれば、右のような行き方を目して、言語研究が「科学的になった」と、あえて言うこともできようかと思われる。

物理学で言うところの「巨視的な観点」からは、決定的な因果の關係とながめられるような事実が、微視的な観点から観れば、実は偶然に支配されているものである、言いかえれば直観的な視角からは原因であり結果であると思えるものも、計量的視角よりすれば、偶然にすぎない、と G. Herdan (Language as Choice and Chance) の言うように、計量的言語研究は、言語要素間の關係を、こういう偶然あるいは確率の問題として記述していくであろう。しかしながら、ここに注意しておいてよいことは、それならば巨視的な見方は常に初歩的で、微視的な見方は、常に、より進歩した立場であるかという、そうは決められない、という点である。その何れをとるべきかは、ひとえに取扱う問題の性質

によるのであって、要は、いま明らかにしようとする問題にとつて、計量的方法を用いることが、はたして有効であるか否かによつて決まってくるはずのものである。語彙の量的な構造の研究などには、恐らくもつとも効果的であろうと思われるこの方法も、決して、これを、あらゆる言語現象の解明に利用できるなどという訳のものではないはずである。

たとえば中谷宇吉郎「科学の方法」が極めて平明にその理を説いているように、統計的な方法によって導き出された法則は、統計の中の個には適用されないのが原則である。もちろん、要因を考慮した層別法というようなものを導入して、条件を次第にこまかくして行くことは可能であろうけれども、しかもなお、それでは説明しきれない何ものかが残ることを考慮しておかなければならない。中谷氏のことばを借りていえば「テレビ塔の天辺から落ちる紙の行方を知ること」は、こういう方法による科学がいくら進歩しても、ついに解決のできない問題である。しかもこうした、ただ一回しか起らないような現象が、言語における表現の問題としては、まことに大切な意味を持つ場合も多いのである。どこまでが解き得る問題であり、どこからは扱ひ得ない問題であるか、という、この方法の限界は、おそらく、この計量国語学会の中心となつて活躍しておられる方々が、一番よくご承知であろう。よく勉強もしないであらかじめ否定的な言辞を弄する前に、われわれはまず、この新しい方法を、力の許す限り理解することに努めるべきである。ただし、こうした「計量的」な研究が、いかに盛んに行われても、一方において、定性的な研究の必要は少しも減じないのみか、定量的な研究の正しい進歩のためには、常

にまず定性的研究が、これに先立って確立されていなければならぬのであるということ、忘れるべきではない。たとえば言語年代学（語彙統計学）といわれるものの方法などについても、われわれは多少、そうした点で、不安を感じるものであることを、告白しなければならぬのである。

言語過程説批判のこと。

これもまた、三十一年十一月三日、京都大学で催された、国語学会公開講演会における服部四郎博士の「言語過程説について」という講演が、そもそものはじまりであったから、なかば前年度のことと属する。しかし博士が、あらためてこれを文字に直して発表されたのは、三十二年一月号の『国語国文』誌上においてであり（たまたまこの号には、菅野宏氏の「言語過程説における過程」という論文も掲載された）、ついで同誌四月号には、時枝誠記博士の「服部四郎博士の『言語過程説について』を読む」と題する回答が掲げられた。そこで、服部博士は再び、今度は「言語研究」三十二号に、「ソスニールの *langue* と言語過程説」と題して四〇頁にわたって懇切丁寧に、これに答えられたのである。この号の発行されたのは十二月三十一日のことであって、（その間、『国語学』二十九輯にも長船省吾氏の、詞と辞の区別に関する論文が掲げられるなどのこともあり）この年は、ちょっと、言語過程説批判に明け、言語過程批判に暮れたような形になった。

服部博士の批判は、まず、時枝博士の言語過程説なるものが、ソスニールのいわゆるラングを否定するところから出発したことに對して、加えられる。 *langue* についての服部博士の理解には

誤解があり、また、それに基づいてソスニールの言語についての見方そのものまでも否定したのは誤りであって、時枝流の言語はソスニールのいう *langage* に準っている。Cours においては、ソスニールは、特にもっぱら *langue* を扱おうとしているのであって、この *langue* に関する説明を *langage* に関するものと誤解してはならない。しかも過程説における「音声概念を喚起し得る聯合の習慣」とか「形式」とか「単語」とかいう概念は、決して *langue* と無縁なものとは考えられない、と、こう服部博士は言われる。すなわち、言語過程説なるものは、ソスニール学説に對立し、ないしはこれを超えるものではなくて、むしろすでにその中に含まれていた考え方の一部を展開させ、強調したものであると、言おうとされるもののように感じられる。

服部博士のこの文章は、まことに周到綿密なものであって、その透徹した論旨には簡単に口をさしはさむ余地を与えない趣がある。過程説批判の文章は、すでにこれまで幾つか提出されて来たけれども、それらは大抵、なお部分的な問題をとり上げるに止まることが多かった。時枝博士は、これらに對しては、「それならば一体、その問題は、あなた自身の体系をもってすれば、どのようなよりうまく説明できるというのか。それが示されなければ、根本的な批判にはならないではないか。」という意味のことを以て答えられるのが、常であった。その点、この論文は、服部博士が、自身の体系を、まづ非常に明確に提示されて、さてそれに基づいて過程説の基本的な考え方を批判的に処理されている点、これまでにはない、根本的な批判というべきものになっていると云えるだろう。

思うに、言語過程説といわれるものが、ソスニールの言語観、

特にその *langue* と称するものの考え方に對する批判から、そもそも出発したものとくに、『國語学原論正篇』において説かれていたのは、たしかにまずかつたと思われる。服部博士が委曲をつくして説かれてるように、ソスニール自身の *langue* の考へ方は、(少くとも *Coins* に述べられてる限りでは) いろいろの解釈の余地を持つもののものであり、時枝博士も、その真意については、あるいは十分に正しく諒解されなかつた点がなかつたかも知れないのである。ただし、時枝博士が構成的言語観と呼ばれるような、誤解(?)された形で移入されたソスニール流の言語観が、昭和初期以来の國語学界に盛んに行われていたことは事実である。ここにおいて、そういう考へ方に対するアンチ・テーゼとして提出された言語過程説なるものの意義を、時枝博士が深く自負され、またその特質を強調しようとされたことは、むしろ当然であつた。そのために博士は『國語学原論』を、まず遡つてソスニール学説の批判という形で説きはじめ、ラングなるものを設定することを全く認めない、というような述べ方をされたものと推測することができる。新しい過程説の立場を際立たせるために、これが、有効、かつ必要な手段であつたことはわかる。けれども、しかし、論がやや極端に走つたこともまた、認めない訳にはゆかないだろう。後に論議的となるような、このソスニール批判そのものは、今にして思えば、むしろ無くもがなものであつた訳で、博士自身が、服部博士への『回答』に述べられたごとくに、『國語学原論』は、この項を抹殺しても、なお批判の対象となり得るはずのものでなければならぬ。また、い

わゆるラングの考へ方にしても、博士はこれを否定されたけれども、服部博士の指摘された通り、「時枝学説はラングの概念と無縁なものは決してない」ということは、いろいろの点で認めざるを得ないと思う。『國語学原論統篇』などにおいて、このことはいよいよ明瞭になつて来たことは、前に指摘したこともあるが(『國語学』二五輯「書評」)、ラング的なものを全然認めないで言語研究をなすことの困難は、やはりわたくしも、認めざるを得まいと思う。

それならば、言語過程説というものは、言語理論として不完全なものであり、新しい言語理論としての価値を担い得ないものであるかと言へば、わたくしは、そうは思わない。「言語学者は言語活動をこそ観察の対象としなければならぬことを強調された」(傍点は服部博士)ことの功績は服部博士も認められるのであるが(『國語国文』一月号、一八頁)、単にそれだけのことでない点があるように思われる。

服部博士が、発話・文・形式の三段階を立て、それぞれに発話者・表現者・(第一)人称者を設定し、意味・意義・意義素を分けて考へようとするのは理論として、まことに精細である。

〔ちなみに言へば、博士は「アタタカイ」^アという文と「アタタカイ」^イという文は同じ(述語)文型を有し、その意義の違いは音調の型の違いに依る、とされる(『言語研究』三二頁脚註)。果してそうであらうか。実はこの二つの文型は完全に同じものではなくて、前者は、終止形述語文型、後者は連体形述語文型というように、さらに分析を進める必要はないであらうか。前者の終止形述語文型に確認的判断の音調の型()^ウを加えた時、確認的判

断文ができるに對して、後者の連体形述語文型に質問の音調の型(↗)を加えた時に、はじめて質問文ができる、と考えるべきではないか。問い返しの音調の型(↘)は終止形文型に加えられるのだから、「シズカダ」「アタタカイ」「トンデイル」という終止形文型にこれを加えれば、いずれも「……というのか？」という意義を表わす文となる。しかし、単純な質問の音調の型(↗)は、連体形文型に加えられるものであるから、これを「シズカダ」という終止形文型に加えても質問文にならないのは当然である。この場合の質問文としては「シズカ↗」が用いられるのが普通であるが、「シズカナ↗」「アタタカイ↗」「トンデイル↗」という質問文を、ここに考えあわせればよい。この場合の「アタタカイ」「トンデイル」に該当するものは「シズカ」ないしは「シズカナ」であつて、「シズカダ」ではない。つまり、表現者が確認的判断をしているということを表わすのは、こういう連体形文型ではなくて、終止形文型および↘であるから、アタタカイおよびトンデイルという(終止形)形式の意義素は、こういう終止形文型と↘との表わす意義とは、やはり独立ではなく、その点で、ダという終止形形式の意義とは、やはり共通のものを含んでいる、と分析するべきではないかとわたしは考える。

しかし、このようにして分析の度を深めていっても、なお、説明しきれない一面が、言語には、残るのではないか。たとえば、発話者が、ひどくまじめな声色、譚子で一あの人は、信用のおける人だ」と発話して嘘をつくという場合において、この発話に該当する文は、その文型も音調の型も肯定断定判断を表わすものと全く同じである。しかもこの発話を、発話者の表情や声色にあら

われた僅かの臨時的特徴によつて、聞き手が、正しく嘘であると判断した場合には、(発話者の匿そうとした意識内容を「発話の意味」から除外するとすれば)これは、発話の意味以上のものを正しく把握したことになる、と服部博士は説かれる(『言語研究』三〇頁)。もつとも、この場合、「発話の意味」としては、発話者の匿そうとした意識内容をも含めて、そう定義することもできることは『国語国文』一月号一四頁に言われるごとくであるが、しからばその場合、匿そうとする意識内容が、普通には、それを積極的に表わそうとする文(ラング)に托して表現されるという、その事情は、どのように説明すべきものであろうか。もしまた、前者のごとくに匿そうとする意識内容を発話の意味から除外するという立場をとつた場合には、「発話の意味」以上のものが聞き手に把握される、その事情が、やはり分析的に説明されなければならぬであろう。しかもこれは、「嘘をつく」という言語活動を説明するためにもつとも大切な点であらう。服部博士においては、当然のことながら、言語は主として聞き手の側から一つつまり表現されたものとして、説明されている。しかし、これを話し手の側から、表現する立場において説明しようとする場合には、ことに、右の事情の説明が、ぜひ必要になるであらう。ここにおいて、表現の型と、それによつて表わされる意識内容との結びつきそのことを問題として、それを説明するために時枝博士のいわゆる「過程」というふうな説明の方法を導入することが、予想される一つの有効な手段ということになるのではないだろうか。

言語においてラングという、分析的に抽出された型を設定する

ことは勿論大切であるが、これをして真に具体的な言語たらしめるもの——やや曖昧な言い方ながら、いわばこれに息を通わせる働き、を説明することは、当然やはり必要と思われる。それを単に過程であると表現しただけでは、まだ十分に真理を把握したことにほならない(『言語研究』一九頁脚註)。かもしれない。しかし時枝博士の真意は、ソスニール流の考え方が、言語研究の対象としてラングをとり上げるのと同じように、言語活動そのものを、単に観察の対象としてではなくて(言語活動を直接観察の対象とする)ことは、先の立場でも同様である)、研究の対象として、直接総合的にとりあげること、あったと思われる。その際の説明のために用いられるのが、この過程的構造という概念であるということになるのであろう。

もちろん言語過程説なるものは、現在の国語学界においては、もはや全面的に肯定されている訳ではない。むしろ批判的に撰取されていると言うべきであらう。しかもなおわたくしは、時枝博士の意図そのものを、高く評価すべきであると思う。まだラングの研究さえ十分でない現在、むやみに総合的研究を目ざすべきではない、といったふうなものではないであらう。ラングの研究は、この上ともますます深められなければならないこと言うまでもないが、しかし、分析的研究のみでは言語の実態は、遂に明かにはなし得ないことを、一面、常に忘れるべきではない。「分析的」と総合的研究と併せ行つてこそ、研究が有利に展開するのである(『言語研究』四〇頁) こと、服部博士の言われる通りなのである。しかもなお、分析的な、ラングを対象とする研究こそオーソドックスな言語研究であり、科学的な態度であるとする

空気が、学界には濃厚であるように、感じるのは、わたくしのひがめ、というものであろうか。

言語技術をめぐる座談会のこと、など。

一つの問題をめぐる、あい異なる意見を抱く人々が、共通の広場に出て、卒直に話しあい、批判しあうことは、学問の進歩のために、非常にたいせつな、意味のある仕事であらう。右の言語過程説論議をはじめとして、先年から引つづく、アクセントをめぐる金田一春彦・柴田武氏らのやりとり。(『国語学』二九輯『国語研究』七号など)、『国語学』二九輯の入門講座「音韻論三」における服部四郎博士の浜田敦氏への批判、大野晋著「日本語の起源」に対する村山七郎氏の書評(『国語学』三一輯)、日本古典文学大学大系万葉集に対する亀井孝氏の批評(『文学』一一月号)、前述長船省吾氏の論文と、これに対する時枝博士の質問(『国語学』三〇輯)など、広い意味でのボレミクというべきものが、この年には、ちよつと思ひ浮ぶものだけでもかなり多く、学界は、それによって活気を与えられた。『講座現代国語学』『日本文法講座』などの講座類ことに前者のごときも、一往、これまでの意見を集成し整理すると同時に残された問題のありかを指摘することに、あゝ似た効果を持ち得たと見えよう。話し合いという点では、座談会「和漢混清文をめぐる」(『文学』三月号)なども、文学と語学の間というようなことが問題になった際として、わたくしには興味があった。

なかでも興味をひかれたのは、『言語生活』一〇月号の「言語技術をめぐる」という座談会である。その冒頭に、出席者の一人、亀井孝氏は、「ほくは言語技術はうそをつく技術だと思つて

るんだ」という形で問題を提起されている。もちろん、このことばには氏一流の皮肉と逆説がこめられていると考えられるし、要は言語技術なるものを、言語というものの本性から理論的に検討してみることの必要を言おうとされるものと思われる。だがしかし、この発言の背後にはやはり、実践の問題に結びつく、こういう言語技術というようなもの——その考え方——自身は、(理想的な意味における技術とはちがって)いわばいやしものであって、直接学問の対象にはならない、というオーソドックスな考え方が流れていることは、確かである。言語の科学的な研究の対象としてとりあげられるものはラングであり、いわゆる言語技術などというものは、これを使いこなすに当って、その上にチヨコチヨコツとつけ加えられるにすぎないものというように考えるか、あるいはまた、そういう実践の問題そのものに、直接、言語研究の対象としての価値を認めるかには、やはり大きな違いがある。もちろん、後者は、やがて、例の一般意味論のように、ひろく発話者の人生観や道徳感のちがいということに、いきなり結びつくことになりかねないわけで、こうなればもう言語研究の範囲を逸却してしまう。しかし、言語生活というようなことを問題におくれば、ことは、必然的に、多少ともここに結びつかないではおかないことになる。『現代国語学』第一巻に、池上禎造氏は「言語生活の構造」を説いて、時代や社会階層による言語生活の違いに及んでおられるが、これはやがて、たとえば政治家的言語生活、官僚的言語生活(たとえば「善処します」で片づける式のもの言)というようなどころにまで連なり、そういう人達の、ものの方・考え方とも結んで考えられなければならないことになる道理であ

らう。これをどこまで言語研究の問題と認めるかは、当然、先にいったような根本の態度によって変わってくるであろうと思われる。

さらにまた、同じく『現代国語学』第一巻巻末の座談会「ことばの改善」における林大氏の、

改善ということを考えるときに、ことが目的として存在する場合と、道具として存在する場合とを考へてはどうでしよう。文学というのは、ことが目的として存在する場合、コミュニケーションとか思考とかいうのは手段としてことが参加するのじゃないか。手段として初めてそこに改善ということが問題になってくる。だから文学、文学的創作というものを手段と考へていない文学者が改善にあまり乗気でないということになるんじゃないでしょうか。

という発言のように、これはまた言語改革に対する基本的な態度と無関係ではないであろう。のみならず、そもそも国語問題を、単なる実践上の政策的な問題として国語学という学問の埒外におくか、あるいは直接国語学上の問題として真剣にとりあげるかという根本の問題を決定するものは、こうした言語観の相違である。その意味においても、こういう、言語ないしは言語研究に対する根本の態度というものは、これから先、いよいよ考究を重ねるべき重要さを担っていると言うべきであろう。

—— 京都大学助教授 ——